

令和8年2月11日

茅ヶ崎市文化財保護審議会

下寺尾遺跡群等保存・活用部会

資料2

---

## 茅ヶ崎市下寺尾西方遺跡第25次確認調査概報

～西方遺跡史跡内容確認にともなう第25次確認調査～

---

2025年

神奈川県茅ヶ崎市教育委員会

## 調査概要

- 1 調査地点 下寺尾字西方 586 番外
- 2 調査期間 令和 7 年 9 月 1 日(月)～令和 7 年 12 月 5 日 (金)
- 3 調査主体 茅ヶ崎市教育委員会  
調査協力 神奈川県教育委員会
- 4 調査担当 三戸智也 (茅ヶ崎市教育委員会社会教育課)
- 5 調査目的 史跡内容確認のための確認調査
- 6 調査面積 224.8 m<sup>2</sup> ( I 区 : 200 m<sup>2</sup>、 I 区拡張区 1.8 m<sup>2</sup>、 II 区 : 20 m<sup>2</sup>、 III～V 区 : 各 1 m<sup>2</sup>)
- 7 遺跡の時期 縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世
- 8 遺跡の位置と立地

西方遺跡は、神奈川県茅ヶ崎市下寺尾字西方547ほかに所在する。JR東海道線茅ヶ崎駅から北に約3.8km、JR相模線香川駅から約1.0kmの距離にあり、現況は県立茅ヶ崎北陵高校のグラウンド・旧校舎跡地のほか、住宅や事業所などとして利用されている。遺跡の一部は国史跡として指定を受け、公有地化されている。

西方遺跡は、小出川と駒寄川にはさまれた東西に延びる台地の突端部に立地し、標高は13～15mを測る。

西方遺跡第25次調査地点は、西方遺跡の東部に位置し、現況は畑となっている。西側には道路と民家を挟んで県立茅ヶ崎北陵高校のグラウンドが位置する。立地は、舌状台地がややくびれる位置にあたり、現地は概ね平坦であるが、標高は東に向かってわずかに下降傾斜する。

本調査地点は、郡庁域区画溝の東外側及び環濠集落東部域にあたり、周辺では2006年の確認調査や2018年の第6次調査などが実施されている。これらの周辺調査では、弥生時代の環濠、古墳時代の竪穴建物、奈良・平安時代の版築遺構などが確認されており、今回の調査地点においても、弥生時代の外側環濠や奈良・平安時代の官衙に関連する版築遺構（移転した正倉の可能性）が分布することが明らかとなっている。

### 9 調査の経緯と経過

#### (1) 調査経緯

令和7年度においては、史跡下寺尾官衙遺跡群及び史跡下寺尾西方遺跡の今後の保存・活用に必要な資料の収集・整理を進めるため西方遺跡の発掘調査を行うこととなっていた。当初は、下寺尾字西方 549 番 2 ほか（県立茅ヶ崎北陵高等学校地内）において、第1次確認調査第2区の再調査を行い、政庁外北西部の様相を把握する予定であった。しかし、旧校舎範囲で実施した発掘調査の内容が検討中であること、学校運営によって発掘調査に制限が生じることなどから、史跡に関連する内容が確実に存在し、土地所有者との調整が整った下寺尾字西方 586 番外地点で発掘調査を実施することとした。

本調査地点は、郡庁域区画溝の東外側及び環濠集落東部域にあたり、周辺では 2006 年

の確認調査、2018年の第6次調査などが実施されている。一方、周辺調査では細長いトレンチ調査に留まり、遺構の規模や位置、分布などの検討が今後の課題になっていた。そこで今回の調査では、2006年調査で確認された環濠の位置と、版築遺構の規模確認を主目的とし、2006年調査の調査区に重複する形で調査区を設定する計画を立てた。さらに、調査の進捗に伴い、拡張や追加調査を行うこととした。

なお、調査の計画・実施に当たっては、茅ヶ崎市文化財保護審議会下寺尾遺跡群等保存・活用部に諮り、必要な指導・助言を賜った。

## (2) 調査の方法と経過

### ア 調査の方法

調査にあたっては、I～V区の調査区を設定した。I区は敷地の北西部に、南北約10m、東西約20mの範囲を設定した。I区の設定にあたっては、安全対策のため北側の隣地境界から2m、西側の道路境界から2mの距離を確保した。また、調査の進捗に伴い、版築遺構の北側を確認するため、I区を1.8m×1m分拡張（I区拡張区）した。さらに、南側に展開する版築遺構の確認のため2m×6m+2m×4mのII区を設定した。加えて、東側に展開する版築遺構の確認のため1m×1mの調査区を3つ（III・IV・V区）設定し、追加調査を行った。

グリッドについては、下寺尾遺跡群の共通グリッドを使用した。本調査地点は、共通グリッドによると100m四方の大グリッドF-2の範疇に収まり、そのうち10m四方の中グリッド14、21～23、31～33、41～42、44、55グリッドに該当する。小グリッドは中グリッドを4つに分割し、北西・北東・南西・南東グリッドの順に1～4の枝番を付し、土層確認や遺構確認、遺物取り上げ等の基本単位としている。しかし、今回の調査では、遺構の平面確認を適切に行うため小グリッドは使用せず、適宜ベルト等を設定した。

遺構の附番は、調査区毎ではなく連番とし、遺物については遺構毎に遺物種別に関わらず連番とした。

### イ 調査の経過

#### 【I区】

- 9/2～9/8 機械掘削・測量
- 9/10～9/26 2006年調査区確認及び掘り下げ
- 9/29～10/20 近世遺構、古代包含層調査
- 10/27～10/29 版築遺構範囲確認・礫検出
- 10/30～11/4 礫の取り上げ
- 11/5～11/11 礫の下部遺構確認
- 11/19 空撮・全景写真
- 11/21～12/5 根石、柱の痕跡確認・測量
- 12/5～12/12 埋め戻し

#### 【I区拡張区】

10/28 掘削・版築確認

11/14 拡張区完掘

### 【Ⅱ区】

10/29～10/30 機械掘削

10/30～11/5 包含層掘削・版築遺構確認 ※礫（根石？）集中確認

11/21 完掘・写真撮影

12/4 埋め戻し

### 【Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区】

11/14 Ⅳ・Ⅴ区設定

11/19 Ⅲ区設定・掘削

11/21 Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区完掘

## 10 調査の概要

### (1) 土層堆積状況

基本層序は、Ⅰ区で確認された土層をもとに把握した。Ⅱ区はⅠ区と同じ様相であった。Ⅲ～Ⅴ区については、Ⅱb層がⅡa層の色調を暗くしたような様相でⅠ・Ⅱ区に比べて橙色スコリアが少ないように感じた。

Ⅰ層は宝永火山灰を含む層で、近世後半から現代の耕作土である。Ⅰa層は直前まで耕起されていたためソフトだが、踏圧でしまる。Ⅰb層は耕起されなかったⅠa層と考えられ、土質は同じである。Ⅰc層は、宝永火山灰の含有量が増加し、色調もややⅡ層よりになる。Ⅰ層以下は古代～中世の包含層と考えられるⅡ層が堆積する。Ⅰ区中央部～北部では、Ⅰ層直下に古代の版築遺構が確認される。Ⅱ層は3層に分けられるが、Ⅱc層はY6号溝（環濠）に近接した部分のみの限定的な堆積で、基本的にスコリアが目立たずさらさらとしたⅡa層とⅢ層由来のスコリアが含まれるⅡb層の2層である。Ⅱb層は下層のⅢ層及び遺構覆土と平面的な区別が付きにくいことがあり、注意が必要である。本調査では現段階で中世陶器の出土が見られず、古代の層相である。Ⅲ層はしまったスコリア質の土で橙色スコリアが目立つことから、Ⅱa層が入り込む遺構の確認がしやすい。一方、Ⅱb層やⅢ層に類似する覆土をもつ遺構は、確認が難しい。Ⅲ層下はⅣ層が堆積し、土質が細かくベタベタし始める。橙色スコリアが下層ほど少なくなり、緻密になっていく。

以下に土層の詳細は記載する。

#### Ⅰ層（耕作土。近世後半から現代の層。）

a層：褐灰色土（10YR4/1）。しまり弱い。粘性少ない。宝永パミス径1～5mmを少量含む。ソフトな耕作土。表土。

b層：褐灰色土（10YR4/1）。しまり強い。粘性少ない。宝永パミス径1～5mmを含み、Ⅰa層と同質。現代の耕作が及ばなかったⅠa層とみられる。

c層：灰黄褐色土（10YR4/2）。しまりあり。粘性少ない。宝永パミス径1～5mmを含む。下部にブロック状にスコリアが入る。

II層（古代から中世の包含層。主たる遺物は古代で現在のところ中世陶器は含まれない。）

a層：黒褐色土（10YR3/2）。しまり弱い。粘性ややあり。橙色スコリア径2mmを含む。サラサラしている。灰黄褐色に近い。IIa'層は黒褐色土（10YR3/2）。しまり弱い。粘性ややあり。橙色スコリア径2mmを含む。ロームブロック・粒や黒色土のブロック・粒を含む。版築遺構が削平されII層と混じった土であり明るく見える。

b層：黒褐色土（10YR3/2）。しまりややあり。粘性ややあり。III層をわずかに含むこともあり、IIa層に比して若干色調暗く、しまりあり。橙色スコリア径2mmを含む。

c層：黒褐色土（10YR3/1）。しまりあり。粘性あり。橙色スコリア径2～3mmを含み、IIa層より多い。III層が混じっており、やや暗い。

III層（古代遺構の確認面。スコリア質でしまり強い。）

III層：黒褐色土（10YR3/1）。しまり強い。粘性あり。橙色スコリア径2～3mmを多く含む。黒色スコリアも含み、全体的にスコリア質でガサガサする。

IV層（全体的にベタベタし緻密な層。橙色スコリアが下部ほど減じる。）

a層：黒褐色土（10YR3/2）。しまりあり。粘性やや強い。橙色スコリア径1～2mmを含む。III層より堆積が緻密になるが、スコリアを一定量含む。色味も暗褐色気味になる。所謂FB。

b層：暗褐色土（10YR3/3）しまりあり。粘性やや強い。IVa層よりスコリア減じる。FB。

c層：暗褐色土（10YR3/3）しまりあり。粘性やや強い。IVb層よりスコリア小さく減じる。FB。

## (2) 発見された遺構と遺物

主な遺構・遺物について、時代ごとに記載する。

### ア 近現代

土坑14基（I区：G4、5、36、37、38、39、46、47、48、II区：G49、50、51、52、53）を確認した。遺構は、Ia・b層を覆土に含んだ掘り込みであり、多くは耕作時の廃棄土坑や木の伐根痕と思われる。覆土からプラスチックごみや鎌状の鉄製品などが出土した。

### イ 近世後半

溝1条（I・II区：K1）、土坑11基（I区：K1、13、31、32、33、40、41、42、43、44、45）、落ち込み3基（K1、2、3）、畝状遺構1基（K1）を確認した。遺構はII層上面で確認でき、覆土に宝永火山灰を含むが、Ib層を基質とする遺構とIc層を基質とする掘り込みがあった。Ib層を基質とする遺構は、近現代の所産の可能性はあるが、ゴミなどを含む明らかな現代の掘り込みと区別するため近世後半以降の範疇とした。

Ic層を基質とする遺構として、K1～3落ち込みがあり、覆土に宝永火山灰を多く含んでいた。南北方向に伸長しているが、立ち上がり不明瞭で底面も凸凹であった。K1～3落ち込みは一つの落ち込みとして捉えてもよいと思われる。K1溝に切られており、K1溝の前身となる区画状の落ち込みと考えられる。

畝状遺構については、東西方向に伸長する溝状の掘り込みが4条確認できた。下部の版築遺構を切っており、覆土に宝永火山灰がわずかに含まれていた。版築遺構を攪拌したと思われるローム粒とⅡa層に類似する土で構成されており、一見すると宝永火山灰が目立たず、時期の判別が困難であった。

総じて耕作地の様相を呈す。

#### ウ 奈良・平安時代

版築遺構2基（Ⅰ区：H1、Ⅱ区：H2）、溝6条（Ⅰ区：H2、3、4、5、7、9）、土坑23基（Ⅰ区：H10、11、12、13、14、15、16、17、18、19、20、21、22、23、24、25、26、27、29、32、34、35、46）、ピット5穴（Ⅰ区：H1、2、3、4、5）、焼土範囲1基（Ⅰ区H1）を確認した。遺構は、Ⅱa層を基質とした覆土であるが、H3号溝の下層はⅢ層ブロックを含んでいた。Ⅲ層ブロックを含む遺構は、Ⅲ層上面での確認、遺構覆土の判別が難しく、Ⅳ層上面で新たに遺構が確認される可能性がある。

版築遺構は、Ⅱb層またはⅢ層を掘り込んで作られていた。H1号版築遺構は南北約10.23m以上、東西約10.96mの規模、H2号版築遺構は南北約5.45m以上、東西約4.64m以上の規模を有する。版築遺構は基壇状に盛り上がり、後世の削平により縁辺部に向かって下降傾斜する傾向があった。黄褐色土（ローム土）と黒色土（Ⅲ層由来か）の互層によって構築されており、中央部は1cm前後の積層が顕著であった。一方、縁辺部は、黒色土の割合が多く、黄褐色土がブロック状で明確に層状を呈さない部分もあった。後述する柱痕跡の位置については、P2、P3、P10、P13などにおいて他時代の遺構の壁面やサブトレンチの土層堆積から版築が厚く作られていることが観察された。2006年調査区壁面だけの観察だが、版築内には瓦などの遺物や礫が含まれておらず、後述する根石と考えられる礫が確認されるのみであった。

版築遺構の上面には、Ⅰ層及びⅡa層が覆っていた。Ⅱa層中（特に標高13.9～14.1m）には、1000点近くの多量の礫（長さ7～8cmの亜鉛礫）が含まれており、特に版築遺構の縁辺に沿って集中する傾向があった。

H1・2号版築遺構の表面には、礫がまとまって入り込む範囲があり、その範囲を中心にしまった暗褐色土やブロック状になった版築土が分布していた。礫の残存状況には差があるが、一定間隔でその範囲が確認されることから、版築遺構の柱痕跡（Ⅰ区P1～P13、Ⅱ区P1～P3）を示すものと考えられ、礫は根石と判断される。Ⅱa層中から発見された多量の礫は、版築遺構の根石が後世の削平を受け、流れ込んだ可能性がある。

上記のような柱痕跡が想定される場合、柱間はH1号版築遺構が3間×3間または3間×4間、H2号版築遺構が3間×3間の可能性がある。柱間寸法は、H1号版築遺構が2.4～2.6mであり、全体の配置から概ね2.4m（8尺）である可能性が高い。H2号版築遺構は2.1～2.4mの柱間寸法の可能性があり、7あるいは8尺の可能性がある。

版築遺構間の距離は、H1号版築遺構の南端とH2号版築遺構の北端間で約6.3mであり、概ね21尺である。

版築遺構の時期については、H1号版築遺構がH1号竪穴建物やY6号溝を切り、ロクロ土師器等を含むIIa層に覆われていることから、7世紀第3四半期から9世紀末までの期間が想定される。H2号版築遺構については直接的に年代を示す成果はないが、H1号版築遺構と同時期と考えられる。

H1号版築遺構の周囲には、溝や土坑などの遺構が多く分布する。そのなかでも版築遺構東・南側のH2・3号溝やH5号溝は、走向が版築遺構の軸に沿っており、版築遺構に関連する遺構の可能性はある。H2号溝については、III層を浅く掘り込み、幅が安定しないほか、底面が二条を呈する部分もある。版築遺構を切る土層を示している箇所もあるが、版築遺構の端部が崩れ溝の立ち上がりに連続した結果、重複関係が生じているように見えている。このような状況からH2号溝は雨落ち溝のような版築遺構に伴う溝と判断される。H5号溝については、確認できたのは東部のみで、版築遺構の下に作られていた。底面は二条を呈する部分もあり、幅は狭い。覆土はIII層を基質としており、下部のH1号竪穴建物の覆土とは区別されることから、版築遺構を作る際にその位置を示した溝の可能性はある。

版築遺構西・南側に分布する不定形の土坑群については、現在のところ版築遺構との関連は不明だが、雨落ち溝底面の凸凹や付随する遺構群の可能性はある。その場合は溝や土坑群の切り合いや平面形の十分な検討が必要である。

#### エ 古墳時代

2006年調査で既に確認されていた古墳時代後期の竪穴建物1棟（I区：H1）を改めて確認した。竪穴建物は西部にカマドが設けられ、深い掘り込みを有していた。精査を行うなかで、覆土から略完形の土師器坏が出土した。土師器坏は特徴から7世紀の第3四半期の所産と考えられ、竪穴建物もその時期以降の埋没と判断される。

#### オ 弥生時代

溝1条（I・II区：Y6）を確認した。古代と同様、III層上面から掘り込まれるが、覆土がIII層と類似し、判別が難しい。後述する大粒のスコリアが覆土に含まれる場合、III層との区別は可能である。

Y6号溝は、幅約3.54m、深さ約1.8m、底面標高約12.2mを測る。南北方向に走向し、断面V字状を呈す。H1・2号版築遺構に上層を切られている。覆土は6層に分かれ、1層には大粒の黒色スコリアが特徴的に含まれていた。Y6号溝は、2006年調査でも確認された弥生時代の環濠である。

### 11 まとめ

今回の調査では、版築遺構の規模・配置・柱痕跡の状況や弥生時代環濠の位置・深さを、既往調査と接続可能な形で整理できた点が成果といえる。とりわけ、版築遺構が3棟以上で南北に整列する可能性が高まったことで、那家関連施設の構成や建物更新（掘立柱建物から礎石建物への移行）を検討するための基礎資料が追加された。今後は、版築土の構成・削平過程の復元、柱間寸法の精査、II層出土遺物の整理を通じて、版築遺構の年代をより具体的

に検証する必要がある。あわせて、環濠の底面標高差や埋没過程の把握を進めることで、弥生時代の集落域の復元と、古代官衙造営に至る土地利用変遷の解明につながると考えられる。

次節では史跡を構成する奈良・平安時代及び弥生時代の成果を中心に述べる。

#### (1) 奈良・平安時代

奈良・平安時代については、2006年調査の成果を追認するようにⅠ区内に矩形の版築遺構を捉えることができた。また、Ⅱ区においても、軸をほぼ同じくする版築遺構を確認できた。これらの版築遺構は、北側の第6次調査で確認された版築遺構と東西規模や向きが概ね一致しており、少なくとも南北に整列して3棟の版築遺構が作られたことが明らかになった。これらの版築遺構は、従前から近接する高座郡家に関係が強い建物の存在を示すことが指摘されており、今回の調査成果によってその可能性が強まったといえる。

特に、県立茅ヶ崎北陵高校グラウンドでは、高座郡家の正倉とされる総柱の掘立柱建物が検出され、出土遺物や他の遺構との重複関係から8世紀前半までには廃絶されたと考えられている。地方官衙の正倉は「掘立柱」から「礎石」建物に建て替えられる例が多いことから、今回改めて確認した版築遺構は、その建物痕跡、すなわち移転した「礎石建の正倉」である可能性がある。

版築遺構の規模は、H1号版築遺構が東西約10.93mを測り、概ね36尺(約10.8m)とみられる。南北長は、版築遺構北端が調査区外に延伸することから確認された約10.23m(34尺)以上となる。H1・2号版築遺構間の間隔は推定約6.3mであることから、第6次調査の版築遺構とH1・2号版築遺構が同規模であると仮定した場合、想定される版築遺構の南北規模は約13.5m(45尺)となり、南北方向に長軸をもつ版築遺構となる。

また、版築遺構上面には柱痕跡と考えられる根石等が分布し、H1号版築遺構の柱間は3間×3間を確認している。上述の規模の版築遺構の場合、H1号版築遺構は3間×4間、H2号版築遺構は3間×3間以上になる可能性がある。柱間寸法はH1号版築遺構が2.4m(8尺)、H2号版築遺構が2.1・2.4m(7・8尺)と考えられ、柱間寸法1.8m(6尺)と2.1m(7尺)が多いとされる茅ヶ崎北陵高校のグラウンドで発見された正倉よりも、やや規模が大きい可能性がある。

柱痕跡は、今回断ち割りなどはせず現状保存としている。柱痕跡の理解には、根石の高低差や大きさの違い、多様な柱痕跡の堆積土に対して、根石や礎石の据え方、構築時の堆積土、建て替え時の堆積土、荷重による落ち込み、建物解体や後世の土地利用、根の攪拌などを区別する必要がある、類例などを精査したうえで今後の調査への課題とした。また、版築においても柱の位置のみ深くすることや構築時の溝の存在、さらに版築遺構の前身となる建物跡の存在なども想定する必要がある、版築遺構の調査を行う場合は、それらを踏まえないといけない。加えて、版築遺構の周囲で確認された遺構との関連も考慮して調査に臨む必要がある。

確認された版築遺構の時期については、現段階では遺構の重複関係から8世紀以降の

所産と考えられるが下限が不明で、出土遺物や堆積土から今後詳細な検討を行う必要がある。

## (2) 弥生時代

弥生時代においても、2006年調査の成果を追認するように環濠を確認することができた。環濠は再測量の結果、2006年調査報告図の位置よりやや西側に走行することが判明し、その結果、北側の第6次調査及び南側の第8次調査まで、概ね直線的に走行していることが明らかになった。一方、環濠底面の標高は第6次・8次調査ともに約11.5mに対し、今回の調査地点では約12.2mであり、約70cmの差が確認された。環濠は限られた調査範囲での確認であるため、実態解明には可能な範囲の調査を進める必要がある。

環濠の時期については、遺構の重複関係と周辺の調査成果から弥生時代中期後半（1世紀ごろ）と想定している。しかし、第6次調査の環濠では弥生時代中期の土器に混じり後期の土器が出土し、さらに環濠覆土のテフラ分析から、弥生時代中期以降もくぼ地の状態であった可能性が示されていることから、構築時期と埋没時期の判断は慎重に行う必要がある。また、環濠上部には古代の版築遺構が構築されており、環濠の埋没時期が版築遺構の年代観にも影響する可能性がある。

## (3) その他の時代

古墳時代においては、古墳時代後期の竪穴建物が確認された。竪穴建物は7世紀末～8世紀初頭の建物であれば、官衙造営に関連する建物である可能性が指摘されている。しかし、今回覆土中層から出土した土師器坏は7世紀第3四半期の所産と考えられ、時期がやや遡る。第6次調査においても、古墳時代後期の建物跡が確認されており、周辺には史跡を構成する弥生時代と奈良・平安時代の間には一定量古墳時代の遺構が分布する可能性が高い。依然、H1号竪穴建物が7世紀末～8世紀初頭である可能性は残っており、周辺調査においても慎重な対応が求められる。

近世後半以降においては、溝や落ち込み、土坑などが確認された。遺構は、土質により二時期に大別できる。遺構の性格としては、耕作による痕跡と考えられ、I区西部のK1～3号落ち込みやI・II区西部のK1号溝は、調査区の西側道路の前身となる土地境を示すと考えられる。